

太陽先生

獅子文六



東方社版

太 陽 先 生



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十七年一月二十日第二刷発行

定価三〇〇円

著 者 獅^し 子^し 文^{ぶん} 六^{ろく}

発 行 者 石 渡 磨 須 子

整 版 者 内 田 柳 次 郎

東京都文京区高田豊川町六〇
発 行 所 東 方 社

振替東京五七七四番
電話大塚側七一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇小説

太陽先生

獅子文六

装
幀

御

正

伸

「だつて、ママ、そりやア、無理よ」

「なにが、無理です」

「だつて、そんな——まるで、まだ沸いてないお風呂へ、飛び込めつて、いうようなもんよ」

といつて、その比喩が、われながら可笑しかつたのか、急に体をゆすつて、大きな葩を撒き散らすような、明るい笑い声——

「ちつとも、可笑しありません。第一、二十三にもなつたひとが、そんな大きな口を開いて、笑うもんじゃありませんよ」

「二十三になつたつて、可笑しいものは、可笑しいわ。知性が発達して、笑うことが、いよいよ多くなる年齢だと思ふわ」

と、また、たまらなそうに、笑い出したのは、自分のいつた言葉を、裏書きするつもりかも知れない。

「呆れるわ、あなたの暢気にも……」

わざと、大きな溜息を洩らすと、母親は、娘の顔から、眼を転じて、一枚張りの大きなガラス戸越

しに、庭園の方を眺めた。

まるで、名ある料亭のそれのように、数奇を凝らした——凝らし過ぎた木や石の布置、敷き詰めた枯松葉に、三月下旬の麗かな日光があたつてゐる。

やがて、二十三歳の令嬢は、白いブラウスに葵色のスカートの膝を、斜に崩しながら、

「あたし、そんなに、暢気かなア……。お嫁に行きたくなるまでは、お嫁に行かないつていうのは、むしろ、慎重なんじゃない？」

「そんなこといつてゐるうちに、ズンズン齡をとつてしまいますよ」

「齡なんて、問題じゃないと思うな。同期のひとつでも、まだ結婚なさらない方、五人も六人もあつてよ。倉田さんの……」

「あの方は、お家が貧しいから、ご縁が遅れるのです」

「じやア、妙子様は？ 新興帝鉄財閥のご本家のご令嬢よ」

「いくら、お金がおありになつても、あのお容貌じゃね」

といつて、母親は、些か自慢らしく、わが娘の顔を眺めた。

「ほんとに、万寿子様はお美しくて……」

と、行く先きさきでいわれるのを、母親の松枝は、決して、お世辞とは考えなかつた。親の慾目が

三ミリぐらい加わつてゐるにしても、娘の万寿子が、人に擡おきんでた美貌に恵まれてゐるのは、双葉山の優勝と同じように、争われぬ事実だと、思つてゐるのである。

第一、容子がいい。肉づきが悪くない癖に、軀からだの線がスラリとしてゐる。洋装にも和服にも向いて、重宝な体格である。その上、色が白い。白いといつても、西洋人や、幽霊の皮膚の色とは違つて、大和島根の乙女らしい色素と弾力を含んで、とても肌日きめが細かい。従つて、白粉のノリがいいから、無暗に厚化粧をする必要がない。

髪は豊かで、織しなやかで、顔たちは、むしろ小さい方だが、引緊つてよく均整がとれて、夜目遠目にも、大クロイ・アップ写しの写真でも、同じように、美人の相が際立つタチなのである。というのも、黒葡萄のように円つぶらかで、射るような、もの怖じしない明眸が、まず人眼を惹くからだろうが、その強烈さを補うように、口許が少女のように仇気あどけなく、いつも綻はなびた朱脣の間に、可愛い前歯が覗いてゐる。ただ、鼻つきに、少々癖があつて、まるで、神様が彼女の眠てゐる時に、指でちよいとお摘みになつたかのように、鼻端が尖つて、やや空を仰むいてゐるのである。一時は、母親も、この鼻の形を、ひどく心配したのだつたが、近頃になつて、それはクロード・コルベール型とかいつて、若い人達の憧れる鼻つきだと知つてからは、最早、わが娘この容貌に、一点の難もないものと、自信を深めたのであつた。

(まず、顔の点なら、人様の娘と、減多にヒケはとらない……)

と、母親は、いつも考えてる。では、家柄や財産の点ではどうかというと、これがまた、減多にヒケはとらないお嬢様なのである。

炭砒王といわれ、貴族院議員まで勤めた四竈万造は、万寿子の父親である。今は、既に亡いが、長男の誠吾が後を継ぎ、父の遺業日東炭砒の大株主重役として、羽振りを利かせている。その持株の時価だけでも相当のもので、まず世間から「富豪」といわれる家である。万寿子が結婚する時には、少くとも持参金十萬に、新邸、自動車が一台——などと、高級金棒引きが、頻りに噂をするほどなのである。

容貌と財産——人の羨む結婚の条件が、万寿子の一身に、二つながら揃っている。だから、降るほど縁談の口があつて、むしろ、二十三歳の今日まで、家庭に残つてるのが、奇蹟と思われるのだが、そこに大きな障害があつた。

なるほど、縁談は降るようにある。万寿子が十九の年に、四谷の聖母女学院を卒業した途端に始まつて、今日に至るまで、持ち込まれた候補者の数は、恐らく、百名を突破するだろう。それが、一つも纏まらなかつたというのは、母堂の権式が高いせいもあるが、実は、当人の万寿子の責任なのである。ご当人が、一向「ウン」といわないのである。

さては、恵まれた条件を鼻にかけて、よほど選択がむつかしいのかというと、そうでもないのである。

る。その証拠に、この候補者のどこが気に入らないなぞという口吻を、彼女は一度だつて、洩らしたことがない。では、恋愛結婚でも望んでいるのか、或いは既に、意中の人でもあるのかと疑われるが、その形跡は絶対になかった。

どうも不思議だから、母親や兄が、強いて理由を追求すれば、

「お嫁に行きたくなるまでは、お嫁に行きたくない」

と、辻褄の合わぬような、合つたような返事をする。そんな我儘な娘は、棄てて置けばいいのに、母親は自分が十八で結婚したせい、二十三という齢を、ひどく気にして、娘が婚期を逸するかのように、騒いでいる。周囲のものも、どうぞ早く、「お嫁に行きたくなる」ようにと、取り替え引き替え、今年になつてから、もう五枚も、候補者写真を持ち込んでいるのである。

敏感な読者は、もうこの辺で、なぜ万寿子が「お嫁に行きたくならない」か、御推察のことと思う。彼女は結婚の食欲を喪つているのである。

鼻の先きへ、年中、皿をつきつけられると、瘦犬でも、しまいには、尻を振らなくなる。いつも勉強室へ追ひ込まれてる子供が、一番、勉強嫌になる。十九の春から、縁談、えんだん、エンダン……と、立て続けに聞かされては、いささか耳も退屈する道理であるが、万寿子は女一人の末ツ子で、幼い時から両親の寵を一身に集めたために、我儘で、怖いものなしで、嫌いなこと、気に染まないこ

とは、断然見向きもしない性質なのだから、いよいよ以て、容易に「ウン」といわない娘が、でき上つたのである。

だが、今度という今度は——と、母親の意見込みも、平常とちがつて、

「まア、とにかく劇場へ行くだけは、行つて頂戴よ。それに、先刻もいうとおり、お見合いなんて、そんな改まつた形式には、決してしない積りなんですからね」

「だつて、やつぱり、その方と逢うんでしよう？」

「いいえ、あなたは、知らん顔してればいいの、紹介だの、ご挨拶だのつてことは、一切、抜きにするように、お約束がしてあるのよ」

「そんなこといいながら、また、食堂で一緒にご飯頂くんじゃないの？」

「あなたが嫌なら、それもやめるわ。あなたは……そうね、ただ、芝居を見ていさえすればいいわ」
度々たびたびのことなので、母親も、万寿子を見合いに引ッ張り出す手口を、よく心得ている。

今度の縁談というのは、母親の謡曲仲間の辻山子爵夫人から持ち込まれたものだが、万寿子の良人として、これほど条件の揃つてゐる相手は、曾て現われなかつた。

候補者の名は織部雅之おりべ まさゆきといつて、齡は三十、次男で、爵位はないが華族、学習院から京大を出てすぐ巴里パリへ留学、国立法科大学フアキョリテトウハクの研究室に入つていたが、最近、戦乱のために帰朝したのである。写真

を見ても、いかにも聡明らしい、品のいい美男子で、しかも、血統純正、身体健全、禁酒禁煙、趣味は読書とスポーツ、系累は兄の男爵夫婦以外に、猫の子一匹ないという――

この縁談には、真ッ先きに母親が惚れ込んで、兄の誠吾が賛成して、とにかく当人に逢わせさえすれば、万寿子の心も動くに違いないという予想から、今夜、歌舞伎座で、それとない会見を行う運びになつてゐるのである。尤も、見合いといつても、その男の方では、音楽会とかで万寿子の姿を見て、非常に気に入つてるといふのだから、謂わば、万寿子だけが見ればいい「見合い」に過ぎない。

「ねえ、ママのお願い……。頼むから、行つて頂戴よ。でないと、ママが、辻山の奥様に、顔向けがでなくなるから……」

「なら、なぜ、早くから、仰有つて下さらないの。不意打ちなんて、卑怯だわ」

「でも、早くあなたに言えば、早く断られるだけだと思つて……。ちつとは、ママの苦衷を察しるものよ」

「一体この間の写真のうちのどの人？」

「まア、呆れた……。あんなに委しく話してあげたのに、忘れたの？」

「だつて、何枚もあるんですもの、いちいち覚えちゃいられないわ」

と、いわれて、母親は苦笑いしながら、赤時絵の手函の蓋を開けた。その中に、今年になつて持ち

込まれた、五枚の写真が入っている。

「ちよつと、待つて、ママ……。いいこと考えたわ」

万寿子は、その写真の全部を、ランプでもするように、扇形にもつて、

「あたし、その方を当ててみるわ。もし、当つたら、歌舞伎座へ行くし、当らなかつたら……」

「いいえ、そんな……いけません……」

と、母親は、娘の狡猾な遁辞に、乗るまいとしたが、万寿子は、委細かまわず、

「この方じゃない？」

と、眼を瞑つて、一枚を抜き出して見せた。

「あらッ、万寿子、これは、きつと、ご縁があるんですよ」

母親が狂喜して、眼を輝かせたのも道理で、それは偶然にも、織部雅之の半身像だったのである。事態がこうなつては、いくら我儘な万寿子でも、今日の見合いを、承知するより外なくなつた。

「いいわ、あたし、菊五郎きくごろうばかり見てるから」

「ええ、ええ、あなたのお好きのように……。ところで、お支度は和服になさる？ それとも、ドレス？」

「どつちでもいいわ」

「外国から歸りたての方には、却つて和服の方が、お珍しいかも知れないわ。丸増から届いた、御殿紫に縫模様の——あれがいいわ。帯は……」

「そんなに慌てなくても、時間はまだ沢山あつてよ」

「帯はと……そうね、あの錆朱の袋帯にしましょう、人形尽しの織出しの……」

居間の置時計は、一時を打つたばかりだというのに、母親は、足許から禽が立つように、騒ぎ始めた。

といつて、ソレお見合いだから、銭湯へ行つて、髪結さんへ廻つて、というような家庭ではない。

お風呂は、毎朝入るのだし、美容院へは、今年五十五歳の松枝さんまで、三日置きに出掛けるというのだから、準備といつても、着物をきて、自用车に乗りさえすれば、いいようなものだ。

と、その時、小間使が現われて、母堂の前に、淑かに手をつき、

「あの棚橋様の奥様から、お電話で……」

「あたし？」

「はア」

「いるつて、ご返事したの？」

「はア」

「困りますね。なぜ、一応、こちらの都合を訊いてから、ご返事しないの。いつも、そういつてあるでしょう」

「はア」

厭あひくなつてゐる女中さんを、尻目しりめにかけて、母堂は、渋々、電話室へ立つていつた。
その後で、万寿子は、クスクスと身を揉もんで笑つた。

棚橋というのは、やはり実業家の未亡人で、母親と同じように、派手好き、社交好きで、何事につけても、母親と競争の相手に廻る女なのである。もし、棚橋未亡人が、来訪の前触れの電話でも掛けてきたのなら、母親の気性として、断ることもできず、歌舞伎座へ行く前の惜しい時間を、どんな顔をして、ご接待をするやら——と、考えただけで、可笑おかしさが、こみ上げてくるのである。

果して、母親は、プリプリと、頬を膨ふくらませて、居間へ帰つてきた。

「万寿子、済まないけれど、大急ぎで、お支度しとくして頂戴」

「あら、どうなすつたの……棚橋さんが、いらつしやるんじゃないの？」

「いいえ……。急に、芝居へ行く途中で、寄り道するところが出来たから、早く家を出なければなら
ないの？」

「まア、どこへ寄るの？」

「『太陽の家』よ」

それを聞いて、万寿子は、意外な面持だつた。

「太陽の家」というのは、この頃ボツボツ、世間へ名の聴えてきた、被虐待児童保護養育の機関である。その創立者で、主事を勤めてる男が、一風変つた人物で、暗い巷ちまたから、拾い上げてきた子供達を、大胆な、独創的な方法で教育して、相当の効果を挙げてることが、上流知識層の一部に、反響を呼んでいたのである。

万寿子の母親は、神川博士夫人に薦められて、お義理で、太陽の家支持会の特別会員に入つたのだが、それを聞くと、棚橋未亡人も、直ちに、同じ手続きをとつて、その上に、百円の寄附金を即納した。すると四竈未亡人——万寿子の母親は、躍起となつて、その翌日に、二百円の寄附をしたのである。

双方の良人が存命中からして、衣裳、交際その他に、競争の激しい二人だつたが、図らずも、今度も「太陽の家」の後援振りに於ても、鎬しのぎを削り合う仲となつたのである。だが、四竈未亡人は、万寿子の縁談の件もあつて、身辺多忙だつたために、「太陽の家」の慰問も、暫く怠つていたところへ、「……わたくし、昨日、つまらない物を持つて、ちよいと慰問に参りましたのよ。可哀そうな子供達が、それは跳び立つほど、大喜びでござアましてね……」

と、棚橋未亡人が、電話で語つたのである。他に、タイした用事もないのに、わざわざ、そんなことを知らせて寄越すなんて、明かな挑戦である。四竈未亡人として、これは黙つていられない。

カッと逆せ上つた頭の中で、彼女は素早い計算を行つた。（歌舞伎座は五時開演なんだから、早目に家を出れば「太陽の家」へ廻つても、大丈夫間に合う！）

そこで、彼女は、令嬢の支度を促すと共に、慰問に持つてゆく木村屋の簞パン二百箇と、林檎の大函一箇とを、大急ぎで註文させて、自分も、直ちに化粧室へ駆け込んで――

それでも三時にまだ間のある頃に、母娘を乗せた自動車は、渋谷松涛の四竈邸の門を、駛り出るところができた。

「ちよいと玄関へ、土産物を置いてくれば、済むんですからね……」

母親は、漆絲のピカピカ光る、黒い羽織の襟を直しながら、弁解らしくいつた。

「ママの競争意識にも、呆れるわ。お蔭で、あたしは孤児院行きのお供までさせられて……」

万寿子は、慈善事業なんて、陰気で、湿ッぽくて、それに、なんだか偽善の匂いまでつき纏うような気がして、虫が好かなかつた。「太陽の家」へ行くのも、勿論、今日が初めてだつた。

「いいえ、孤児院とは少し違うのよ。あなた、「唄わせて頂戴」つていうものを、知つてる？」

「知つてますわ、それくらい……」